

第 3 部

有識者の分析

第3部 有識者の分析

自尊感情とその関連要因の比較：日本の青年は自尊感情が低いのか？

北海道大学大学院 教育学研究院 准教授 加藤弘通

1. はじめに

諸外国に比べ日本の青少年の自尊感情が低いことが問題視されることが多い（古荘，2009）。今回の調査結果においても、自尊感情と関連すると思われる「自分への満足感（「私は、自分自身に満足している）」をみると、他国の平均値が 3.00 前後であるのに対し、日本の平均値は 2.31 と際だって低い値を示している（図 1）。統計的に検討してみても、「アメリカ>イギリス>ドイツ，フランス>韓国，スウェーデン>日本」という順で、日本は他のいずれの国と比べても、有意に低い（ $F(6, 7424)=169.08, p<.001$ ）。この項目は、「そう思う（4点）」から「そう思わない（1点）」¹までの4件法でたずねていることから、2.5点を境にそれよりも高い値であれば、その国の青年が平均して、どちらかという「自分に満足している」ことを表しており、それよりも低い値であれば、どちらかという「自分に満足していない」ことを表していると言える。したがって、日本の青年の平均値は、どちらかという日本の青年が自分に満足していないことを表しており、他国の青年の平均値はどちらかという自分に満足しているという質的な違いを表していると考えられる。

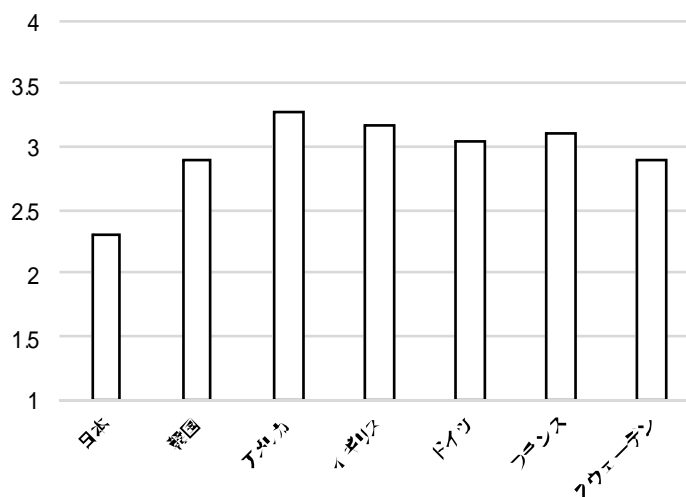


図1 「自分への満足感」の比較

このような結果を見ると、「日本の青年は良くない状態にあるのではないかと評価したくなるが、果たしてこのような評価は妥当だろうか。というのも、「自分への満足度」が低

¹ 元の調査では「自分への満足感」項目に対し、「そう思う（1点）」から「そう思わない（4点）」の4件法の回答形式が取られていたが、本章の分析に際して、配点を逆転させ「そう思う（4点）」から「そう思わない（1点）」に修正した。以下いずれの項目においても同様の修正を加えている。

いということは、必ずしも「悪いこと」とは限らない場合もあるからである。例えば、向上心が高い者は低い者に比べ、「自分への満足度」は低いことが考えられる。また根拠なく「自分への満足度」が高いというのも、自分自身の課題が見えていないという意味で自己認識としては問題があるだろう。あるいは文化によっては、「控えめ」に自己をとらえることが美德とされる場合もありえる (Yamaguchi, et.al, 2007)。

それでは今回の調査結果における日本の青年の「自分への満足感」の低さをどのようにとらえたら良いのだろうか。上記のような可能性を考慮して分析を行うためには、単に平均値の高低だけをみるのではなく、どのような要因が関連しているのかを検討する必要がある。さらに「青年」と一口に言っても、本調査が対象としている調査協力者の年齢は 13 歳～29 歳と幅がある。したがって、年齢層によって違いがあり、それが全体の平均値に影響を与えている可能性も考えられる。このような点を考慮し、日本の青年の特徴をより詳細に知るためには、全体としての値を比較するだけではなく、年齢やジェンダーによってどのように推移するのか、またその推移パターンに違いはあるのかなどを他国の青年と比較し検討していく必要もあるだろう。

以上のことをふまえ、本章では日本の青年が顕著に低い値を示した「自分への満足感」を分析の中心に据え、その要因や発達のな変化など、より詳細な検討を加える。それにより現在の日本の青年の自尊感情の特徴を明らかにしていく。

2 . 自尊感情の実態についての分析

自尊感情との関連で確認しておくとして、今回の調査には、それにかかわる項目が 2 項目入っている。1つは上述した「私は、自分自身に満足している」であり、もう 1つは「自分は役に立たないと強く感じる (逆転項目)」である。これらは自尊感情に関する最も代表的な尺度である Rosenberg (1965) の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982), 「だいたいにおいて、自分に満足している」と「何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う」に対応する項目である。したがって、これら 2 つの項目について検討を加えることで、各国の青年における自尊感情について考察を加えていく。

(1) 「自分への満足感」の発達の推移

図 2 は「自分への満足感」の発達の推移²を示したものである。やはり日本の青年は、他国の青年に比べていずれの年齢においても「自分への満足感」が低い。またジェンダーによる違いもみられ、日本の青年の場合、10 代中頃から 20 代前半までは、男子に比べ女子のほうが満足感が低いのにに対し、それ以降は女子のほうが「自分への満足感」が高くなる傾向がみられる。言い換えるなら、日本では高校生～大学を卒業 (に相当) する頃までは男子のほうが、自分に対する満足感が高く、大学を卒業して社会に出ると (高卒者にとって

² 発達の推移やパターンというのは、通常は同一対象者の時間的変化を示した縦断データを指して用いる用語であるが、ここでは各年齢ごとの横断データの推移のことを指して用いる。

は社会に出て数年経つと), 女子のほうが「自分への満足感」が高いということである。このように青年期の途中で, 男女の「自分への満足感」の高低が入れ替わるのは, 日本だけであり, 他国の場合は, 概ねどの年齢においても, 男子よりも女子のほうが満足感が低い。

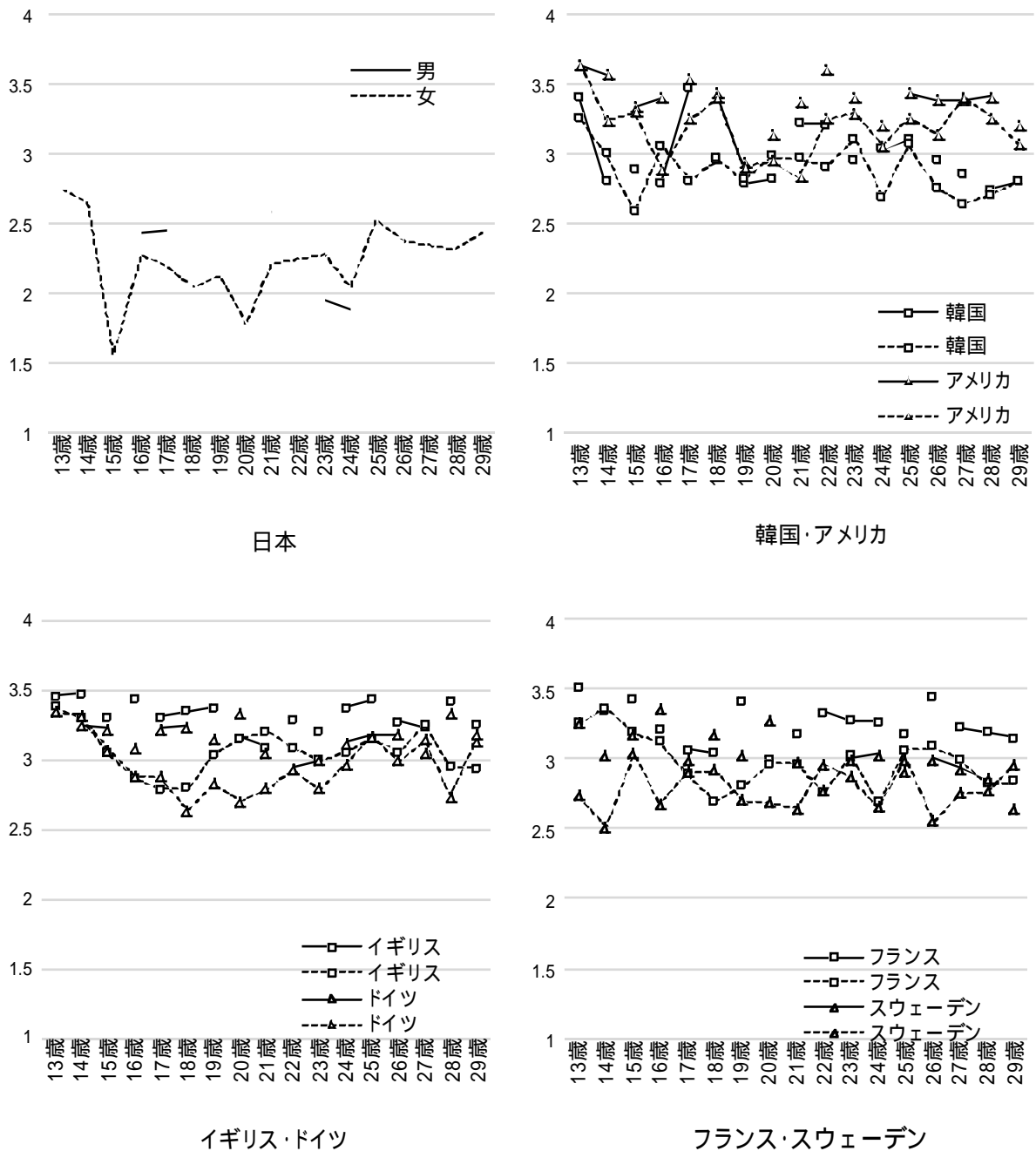


図2 自己への満足感の推移

自尊感情については, これまでも欧米の主要な研究 (Robins, et.al, 2002) で, 青年期から老年期前期あたりまでジェンダー差がみられ, 男性に比べ女性のほうが, 自尊感情が低い

という結果が報告されており、日本を除く他の6カ国は概ねその傾向に沿っている。しかし、日本の場合、明確にそれとは異なる発達パターンを示しており、これは日本の青年の1つの特徴と考えられる。さらにジェンダー差をふまえ検討を加えると、日本の女子青年においては、15歳、20歳、24歳での著しい低下がみられる。特に15歳での低下は、女子のみに見られる現象であり、その程度も著しい(ただし15歳女子はN=9と人数が少ないため、一般化には注意が必要である)。同様の変化は韓国の女子にもみられるが、欧米の女子には見られない現象である。

ここまでの結果をまとめると、日本の青年は他国の青年に比べ、「自分への満足感」が低く、それは青年期のいずれの時期にも通じることである。その一方で、青年期の後半では、男子に比べ女子の満足感のほうが高くなるという他国の青年には見られない発達の推移のパターンが見られた。それでは、このような「自分への満足感」の低さを、よく指摘される日本の青少年の自尊感情の低さと結論づけても良いものなのだろうか。次ではこのことを検討するために、自尊感情のもう一つの側面である「自己有用感」について検討していく。

(2) 「自己有用感」の発達の推移

今回の調査で、もう1項目、自尊感情と関連する項目として自己有用感に関する項目、「自分は役に立たないと強く感じる(逆転項目)」が含まれていた。この項目は得点が高いほど、「自分は役に立たない」と強く感じているということである。したがって、もし日本の青年の自尊感情が低いとするなら、「自分への満足感」とは逆にこの項目についても他国と比べて高い値が示されることが予想される。そこでまず各国の自己有用感の平均値を比較した(図3)。

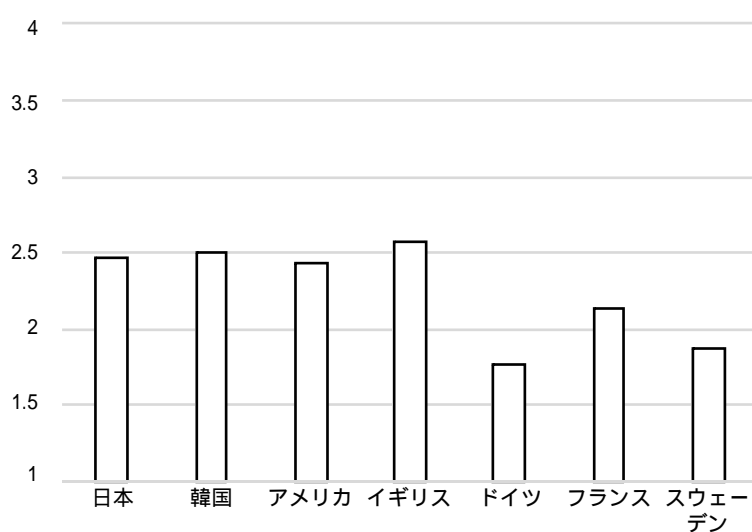


図3 自己有用感の比較

その結果、日本の青年は、ドイツ、フランス、スウェーデンに比べると統計的に有意に高い値を示したが、韓国、アメリカとのあいだには有意な差は見られず、逆にイギリスからみると有意に低いという結果が得られた ($F(6, 7424)=136.70, p<.001$)。つまり、自己有用感について、日本の青年は他国の青年に比べて著しく低いとは言えず、アメリカや韓国の青年とはほぼ同程度であり、イギリスの青年と比べると、日本の青年のほうが自己有用感が高いことがわかる。したがって、自己有用感という視点から自尊感情をとらえるなら、必ずしも日本の青年は、自尊感情が低いとは言えない。

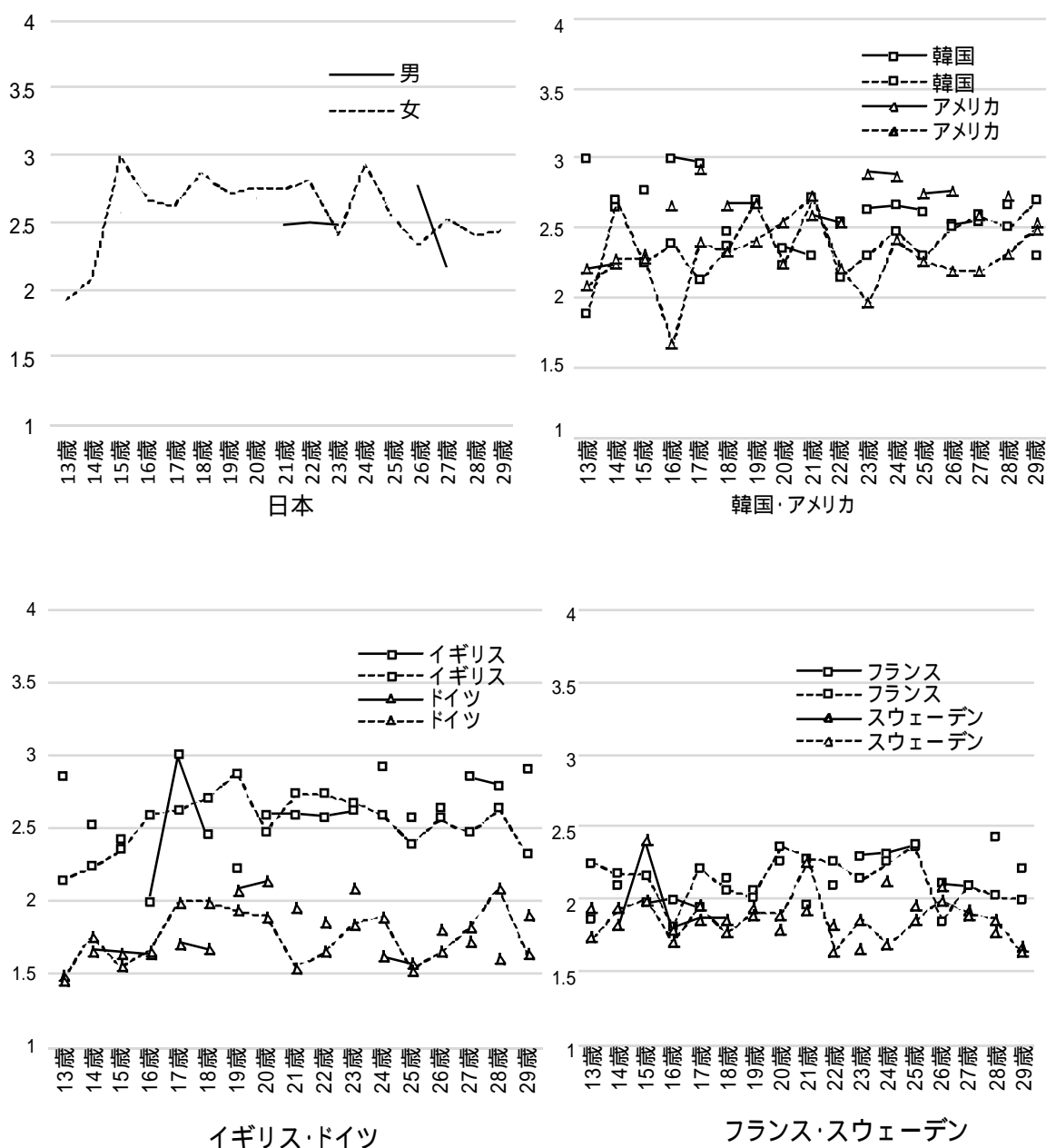


図4 自己有用性の推移

さらに年齢による違いがあるかどうかを検討するために、自己有用性の発達の推移を図4に示した。その結果、日本の青年では14歳～23歳ごろまでは、女子のほうが「自分を役に立たないと強く感じる」程度が高いが、それ以降は男女によるはっきりとした違いはみられない。つまり、「自分への満足感」と比較すると、青年期前半のジェンダー差のパターンは一致しているが、青年期後期についてはそれほど一致していないということである。またいずれの国を見ても、自己有用感については、「自分への満足感」、あるいは自尊感情に関する先行研究 (Robins, et al, 2002) でみられたような明確なジェンダー差は認められなかった。

さらに日本の女子青年の「自分への満足感」の発達の推移をふまえ、自己有用感の推移についてみていくと、「自分への満足感」が著しく下がった15歳と24歳においては、自己有用感についても「自分は役に立たないと強く感じる」程度が著しく上昇することがみて取れる。ただし、満足感で見られた20歳時における低下に対応する変化は、自己有用感では見られず、18歳、22歳における変化の方が著しい。また自己有用感における15歳時の変化は、男子においてもみられ、これも「自分への満足感」とは異なる点である。このようにみると、日本の青年における自己有用感の青年期前半における変化（自己有用感への不安の高まり）は、15歳、18歳と進学あるいは環境移行に伴う変化である可能性が推測される。

それでは「自分への満足感」と自己有用感のあいだにはどのような関係があるのだろうか。以下では各国ごとに、「自分への満足感」と自己有用感の関係について検討する。

(3) 「自分への満足感」と「自己有用感」の関係

青年における「自分への満足感」と自己有用感がどのように関連しているのかを検討するために、各国ごとで「自分への満足感」と自己有用感の相関を求めた(表1)。その結果、日本の青年においては比較的強い負の相関が認められた ($r=-.42, p<.01$)。つまり、日本の青年においては、「自分への満足感」が高いほど、「自分は役に立たないと強く感じる」程度が低くなる(言い換えるなら、自己有用感が高い)ということがわかる。

表1 「自分への満足感」と自己有用感の相関

日本	-.42**
韓国	-.16**
アメリカ	-.06
イギリス	-.06*
ドイツ	-.20**
フランス	-.18**
スウェーデン	-.29**

* $p<.05$, ** $p<.01$

しかしその一方で、他国の青年においては、ほとんど相関がみられないか、みられたとしても弱い相関しかみられないという結果であった。特に「自分への満足感」がもっとも高かったアメリカの青年においては、この両者のあいだに統計的に有意な相関はみられなかった。

つまり、日本の青年の場合は、「自分への満足感」が自己有用感との関連のなかで考えられているのに対し、他国の青年においては、「自分への満足感」が自己有用感とはあまり関係なく考えられている可能性があるということである。とりわけ「自分への満足感」の平均値が高いアメリカやイギリスの青年においては、「自分への満足感」と有用感のあいだに強い相関が見られなかった。したがって、これらの国の青年における「自分への満足感」の高さは、「自分が役に立つ人間であるか」どうかといった自己有用感とは関係のない次元で判断されているといえる。

こうした結果から改めて、「自分への満足感」について考察を加えるなら、次のようにとらえ直すこともできるのではないだろうか。すなわち、「日本の青年は『自分への満足感』は低い、それは自己有用感との関連で考えられた上での結果である。それに対してアメリカ・イギリスの青年の「自分への満足感」は非常に高いが、それは自分が役に立つ存在であるといった自己有用感とは別次元で考えられた結果である」と。つまり、日本の青年の満足感の低さは、自己の有用性に関する判断と関連した上での自己評価であり、他国の青年とは異なる基準でとらえられた結果である可能性が考えられるのである。

以上のことから、同じ「自分への満足感」であっても、日本の青年と他国の青年では、その判断の際に依拠する要因が異なる可能性が示唆された。それでは「自分への満足感」には、これ以外にどのような要因が関連しているのだろうか。まずは「自分への満足感」とその他の自己認識に関する項目の関連性についてみていく。

3．自己認識において自尊感情と関連する要因の分析

(1) 自己認識項目との関連

表 2 は各国別に「自分への満足感」と他の自己認識に関する項目（具体的な項目の内容については表 2 の備考を参照）の相関を示したものである。いずれの国も「長所」がもっとも強く自分への満足度と強く関連しており、次いで「主張性」と「挑戦心」の高さが比較的強く関連していることがわかる。

他の要因についてみていくと、「親の愛情」は韓国において比較的高い相関がみられ、韓国の青年は「親から愛されていると思う」ほど、「自分への満足感」も高くなることがわかる。また、「刹那的」については、韓国、イギリス、フランスで比較的高い相関がみられ、これらの国の青年は「今が楽しければよいと思う」ほど、「自分への満足感」が高いことがわかる。また「不信感」については、それほど高くはないが、他国に比べ、日本の青年において若干高い負の相関がみられる。つまり、日本の青年は、「人は信用できないと思う」ほど、「自分への満足感」は低いということである。

表 2 「自分への満足感」と自己認識の相関

	長所	親の愛情	主張性	挑戦心	刹那的	不信感	負の特性
日本	.56**	.26**	.39**	.34**	.21**	-.24**	-.10**
韓国	.56**	.37**	.43**	.44**	.38**	-.12**	-
アメリカ	.50**	.25**	.46**	.43**	.28**	-.15**	-
イギリス	.55**	.26**	.42**	.43**	.33**	-.07*	-
ドイツ	.48**	.27**	.42**	.25**	.23**	-.15**	-.07*
フランス	.61**	.28**	.34**	.34**	.38**	-.10**	-
スウェーデン	.52**	.23**	.39**	.42**	.27**	-.17**	-.12**

—は相関なし, *p<.05, ** p<.01

【備考】

長所：「自分には長所があると感じている」

親の愛情：「自分の親から愛されている（大切にされている）と思う」

主張性：「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」

挑戦心：「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」

刹那的：「今が楽しければよいと思う」

不信感：「人は信用できないと思う」

負の特性：「よくうそをつく」

(2) 自己認識に関する要因からみた日本と諸外国の青年の特徴

ここで注目したいのは、「今が楽しければよいと思う」という刹那的な態度が、イギリスやフランスといった比較的「自分への満足感」の値が高かった国において、より高い相関の値を示しているということである。特にイギリス、フランスでは「自分への満足感」と自己有用性とのあいだには、ほとんど関連性がみられなかったことを考え合わせると、これらの国の青年と日本の青年の「自分への満足感」に関連する要因の違いがはっきりするのではないだろうか。以下、表 3 に「自分への満足感」が高かった上位 3 カ国と日本の青年の満足感に関連する自己認識の要因を相関係数の絶対値.40 以上を基準に高い順にあげる。

表 3 「自分への満足感」と関連性の高い要因

アメリカ	長所(.50)	主張性(.46)	挑戦心(.43)
イギリス	長所(.55)	挑戦心(.43)	主張性(.42)
フランス	長所(.61)	—	—
日本	長所(.56)	自己有用感(.41)	—

() 内は相関係数の絶対値

こうしてみると「自分への満足感」が高い国の青年の特徴は、「長所」や「主張性」「挑戦心」といった自分自身の特徴やスキルによって、「自分への満足感」が影響を受けやすいということである。それに対して、日本の青年の「自分への満足感」は、「長所」といった要因に加え、「役立つ（有用感）」あるいは他者への「不信感」という対他者との関係によって決まる要因からも影響を受けやすいということである。言い換えるなら、アメリカやイギリス、フランスといった国の青年の「自分への満足感」の高さは「自分はどうか？」といった対自的な自己認識の要因によるものであるのに対し、日本の青年の「自分への満足感」の低さは、対自的な要因のみならず、「自分は他者にとってどうか？」「自分にとって他者はどうか？」といった対他的な自己認識の要因によっても影響を受けているということが考えられる。ここに単なる「自分への満足感」の高低だけでは理解できない、日本の青年と諸外国の青年の違いを理解することができる。つまり、日本の青年と諸外国の青年では、「自分への満足感」を判断する際に関連する要因が異なるということである。

ここまで青年の自己認識という視点から、自尊感情について考察してきた。それでは自己認識以外の要因でどのような要因が青年の自尊感情に関連しているのか。以下ではそれについてみていく。

4．自尊感情と関連する他の要因の分析

ここでは、自己認識以外で、青年の自尊感情に影響を与えると思われる要因を分析していく。1つは、人間関係の要因で具体的には友人、恋人に関わる要因であり、2つは、社会的な居場所に関する要因で家庭、学校や職場、地域、社会に対する満足度との関連を検討していく。

(1)人間関係と自尊感情の関係

まず自尊感情に関連する人間関係にかかわる要因について分析していく。取り上げるのは、友人、恋人である。今回の調査では、友人との関係と恋人との関係に対する「満足感」と「安心感」という2つの視点から調査が行われている。それぞれが自尊感情に関わる自己認識にどの程度関連しているかを検討する。

表4は各国の青年の「自分への満足感」と友人・恋人に対する満足感・安心感との相関を求めた結果である。日本の青年では、統計的に有意な相関がみられるものの、いずれの要因も他国の青年に比べると、それほど高い値ではなく、「自分への満足感」と友人、恋人との関係への満足感、安心感とのあいだに強い関連性はみられなかった。

その一方で、「自分への満足感」が高いアメリカ、イギリス、ドイツの青年においては、友人関係への満足感とのあいだに比較的強い相関がみられた。つまり、アメリカ、イギリス、ドイツの青年は、友人との関係への満足感が高いほど、「自分への満足感」も高いことがわかる。また韓国の青年においては、他国の青年に比べ、恋人との関係への満足感、安

心感が「自分への満足感」に強く関連していた。つまり、韓国の青年は、恋人との関係に満足し、安心しているほど、「自分への満足感」が高いことがわかる。

表4 「自分への満足感」と友人・恋人との関係の相関

	友人関係 満足感	友人関係 安心感	恋人関係 満足感	恋人関係 安心感
日本	.24**	.22**	.20**	.21**
韓国	.35**	.23**	.39**	.34**
アメリカ	.46**	.33**	.33**	.22**
イギリス	.40**	.30**	.17**	.13**
ドイツ	.39**	.37**	.26**	.26**
フランス	.31**	.24**	.26**	.27**
スウェーデン	.36**	.34**	.20**	.21**

** p<.01

(2) 社会的な居場所と自尊感情の関係

それでは社会的な居場所への満足感と「自分への満足感」はどのような関係にあるのだろうか。それを検討するために、家庭、学校、職場、地域、社会への満足感³との相関を求めた（表5）。

表5 「自分への満足感」と社会的居場所への満足感との相関

	家庭	学校	職場	地域	社会
日本	.36**	.33**	.23**	.10**	.22**
韓国	.34**	.39**	.30**	.20**	.28**
アメリカ	.51**	.42**	.35**	.32**	.36**
イギリス	.43**	.37**	.29**	.28**	.31**
ドイツ	.47**	.37**	.17**	.18**	.21**
フランス	.33**	.30**	.21**	.14**	.18**
スウェーデン	.40**	.36**	.22**	.21**	.23**

** p<.01

日本の青年は、家庭と学校への満足感とのあいだで比較的高い相関がみられ、地域や社会、職場への満足感とのあいだでは、それほど高い相関はみられなかった。つまり、日本

³ 家庭、学校、職場、社会については満足感のみであり、安心感は測定されていない。また地域については「満足しているか」ではなく「好きであるか」が聞かれている。

の青年の「自分への満足感」については、家庭生活と学校生活は比較的強い関連性があるが、職場や社会、特に地域についてはそれほど関連性がないと考えられる。

一方、日本以外の国においても、家庭生活、学校生活との間で高い相関がみられた。特にアメリカ、ドイツ、イギリス、スウェーデンでは家庭生活への満足感と「自分への満足感」の関連性が強く、家庭生活に満足しているほど、「自分への満足感」も高いことがわかる。またアメリカ（次いでイギリス）では、すべての居場所における満足感とのあいだで比較的高い相関が得られ、日本やドイツ、フランスと比べ、多くの社会的な居場所への満足感が、「自分への満足感」と関連していることがわかる。

ここまでの結果をまとめると、友人関係への満足感、家庭、学校生活への満足感が、各国の青年の「自分への満足感」と相対的に強く関連していた。しかし日本の青年に注目するならば、他国と比較して、これらの人間関係や社会的居場所の要因は比較的弱い関連性であるといえる。また、アメリカやイギリスといった「自分への満足感」が高い国の青年に比べ、日本の青年は、そこでの満足感が「自分への満足感」へとつながる人間関係や社会的な居場所がそれほど多くないと考えられる。

5. まとめ

本章では、「自分への満足感」に注目し、自尊感情の発達の推移、関連要因について検討してきた。まずは日本以外の諸外国の青年の特徴をまとめ、次いで日本の青年の特徴について考察を加えたい。

(1) 日本以外の各国の青年の自尊感情の特徴

韓国

「自分への満足感」については日本に次いで低いが、平均値は 2.91 であり、平均的には韓国の青年は、どちらかという自分自身に満足しているといえる。発達の推移をみると、ジェンダー差が若干開く年齢（15 歳、17 歳、24 歳）が、一時的なものであり、全般的にはジェンダーによる大きな差はみられない。自己有用感については、ドイツ、フランス、スウェーデンと比べると低かった⁴ものの、日本、アメリカ、イギリスとのあいだには有意な差がみられなかった。

「自分への満足感」に関連する要因としては、自己認識に関する要因では、相関係数が高い順に（以下同）長所、挑戦心、主張性、刹那的、親からの愛情であり、自己有用性とのあいだには非常に低い相関しか認められなかった。また人間関係・社会的な居場所に関しては、恋人関係、学校、友人関係、家庭、職場が比較的強く関連していた。

韓国の青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるならば、自己認識の要因

⁴ 「低かった」という表現を用いているが、自己有用感に関する図 3 のグラフの得点では高い値を示している。これはこの項目が逆転項目であるためである。つまり、「自分は役に立たないと強く感じる」に対して「そう思う（4点）」と答えた者は、グラフ上の得点は高いが、「自己有用感は低い」と解釈している（逆もまた同じ）ということである（以下、自己有用感の記述に関しては同じ）。

では「今が楽しければよい」といった刹那的な要因や親からの愛情といった要因が関連していること、人間関係・社会的居場所については、他国の青年に比べ、恋人との関係への満足度が強く関連していることである。

アメリカ

「自分への満足感」については、平均値は 3.28 と最も満足感が高い。発達的な推移をみると、ジェンダー差がなくなる年齢（15 歳，18-19 歳，27 歳）があるものの一時的なものであり、全般的にはジェンダーによる差がみられ、男性に比べ、女性のほうが満足感が低い。自己有用感については、韓国同様、ドイツ，フランス，スウェーデンに比べると低かったが、日本とのあいだには有意な差がみられず、イギリスに比べると有意に高かった。

「自分への満足感」に関連する要因としては、自己認識に関する要因では、長所、主張性、挑戦心が特に高い一方で、自己有用性とのあいだには相関はみられなかった。また人間関係・社会的な居場所に関しては、家庭がもっとも高く、次いで友人関係、学校への満足感との関連が高かった。またそれ以外の要因も他国に比べ、関連性が高く、アメリカの青年の自分への満足感には、多くの人間関係や社会的居場所が「自分への満足感」に関連していた。

アメリカの青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるなら、自己認識については、長所や主張性、挑戦心といった対自的な要因が強く関連している一方で、自己有用性とのあいだには関連性がないことである。また人間関係・社会的居場所については、他国の青年に比べ、より多くの関係、居場所が関連していることも特徴的である。

イギリス

「自分への満足感」については、平均値は 3.18 とアメリカに次いで 2 番目に高い。発達的な推移をみると、女子が 10 代前半から後半にかけて、「自分への満足感」が低下するのに対し、男子はほぼ一定の高い水準を保って推移している。一方、自己有用感については、もっとも低く、韓国を除き、すべての国とのあいだに有意な差が見られた。

「自分への満足感」に関連する要因としては、自己認識に関する要因では、長所、挑戦心、主張性が特に高く、刹那的も比較的強く関連していた。また自己有用性とのあいだには相関はみられなかった。また人間関係・社会的な居場所に関しては、家庭、友人関係への満足感との関連が高かった。またそれ以外の要因では、学校、社会への満足感も比較的強く関連していた。

イギリスの青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるなら、自己認識については、長所や挑戦心、主張性といった対自的な要因に加え、刹那的な要因が比較的強く関連していることである。その一方で自己有用性とのあいだには関連性がない。また人間関係・社会的居場所については、友人、家庭、学校といった他国の青年と共通するものが多いが、アメリカ同様、社会への満足感との関連性が高いことも特徴の 1 つである。

ドイツ

「自分への満足感」については、平均値は 3.06 と今回の調査国のなかでは中間的な値で

あった。発達的な推移をみると、男子がほぼ一定であるのに対し、女子は15歳から20歳前後にかけて、「自分への満足感」が低下し、ジェンダー差がみられる。一方、自己有用感 は、もっとも高く、すべての国とのあいだに有意な差が見られた。

「自分への満足感」に関連する要因としては、自己認識に関する要因では、長所、主張性が比較的強く関連していた。また自己有用性とのあいだにはそれほど強くはないが、相関がみられた。家庭への満足感がもっとも強く関連しており、次いで友人、学校への満足感との関連が高かった。またそれ以外の要因はそれほど強く関連していなかった。

ドイツの青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるなら、自己認識については、長所や主張性といった対自的な要因が関連していたが、関連する要因が少なかったことである。人間関係・社会的居場所についても同様で、家庭への満足感がもっとも強く、友人関係や学校への満足感も関連しているが、それ以外のものはあまり関連性が強くないのが特徴である。

フランス

「自分への満足感」については、平均値は3.11と今回の調査国のなかでは中間的な値であり、平均的にみれば、自分に満足しているといえる。発達的な推移をみると、男子がほぼ一定であるのに対し、女子が15歳から21歳まで「自分への満足感」が一貫して低下し、ジェンダー差がみられる。一方、自己有用感に関しても、ドイツ、スウェーデンに次いで高い値であった。

フランスの青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるなら、自己認識については、長所が突出して強く関連する一方で、「今が楽しければよいと思う」といった利他的な要因も比較的強く関連していることである。また自己有用感との関連性は非常に弱い。人間関係・社会的居場所について、家庭、友人関係、学校への満足感が比較的強く関連しているが、他国の青年に比べ、関連性が弱いことが特徴である。

スウェーデン

「自分への満足感」については、平均値は2.90と今回の調査国のなかでは中間的な値であり、平均的にみれば、どちらかという自分に満足しているといえる。発達的な推移をみると、10代では比較的是っきりとしたジェンダー差がみられ、男子に比べ、女子のほうが自分への満足感が低い。一方、自己有用感に関しては、ドイツに次いで高い値であった。

スウェーデンの青年の「自分への満足感」に関連する要因の特徴をあげるなら、自己認識については、長所、挑戦心、主張性といった対自的な要因が強く関連していることである。また自己有用感との関連性は、日本の青年ほど強くないものの、関連性がみられた。人間関係・社会的居場所について、家庭、友人関係、学校への満足感が比較的強く関連している。

(2)日本の青年の自尊感情の特徴

今回の調査で日本の青年の「自分への満足感」は、他国と比べ際立って低い値であり、

日本の青年が、自分に対する満足感が非常に低いことが示された。しかし、その一方で、同様に自尊感情を測定している自己有用感では、ほぼ中間に位置し、他国の青年に比べ、特段低い値ではなかった。

また両者にそれなりの強い相関がみられたのは、日本だけであり、日本の青年においては「自分への満足感」には「自分は役立つ存在であるか否か」といった自己認識が関係していると考えられる。つまり、日本の青年の「自分への満足感」の低さは、「自分への満足感」と自己有用感への不安を関連づけているがゆえに生じているのかもしれない。実際、自己有用感に関しては、日本と同程度であるアメリカや日本よりも低いイギリスの青年の「自分への満足感」は、今回の調査対象国のなかで上位 1, 2 位を占める高さであるが、この両国においては「自分への満足感」と自己有用感のあいだに相関はみられないのである。

さらに、長所や主張性、挑戦心など、いずれの国の青年においても「自分への満足感」と高い関連性をもつ要因がある一方で、日本とそれ以外の国で関連性の程度が異なる要因もあった。例えば、「今が楽しければよいと思う」といった利他的な要因は、韓国、イギリス、フランスでは「自分への満足感」と比較的強く関連していたが、日本の青年は、今回の調査対象国の中ではもっとも関連性が弱かった。またその一方で、「人は信用できないと思う」といった不信感については、相関係数自体はそれほど高い値ではないが、他国の青年と比べ日本の青年では、「自分への満足感」との関連性が強かった。つまり、日本の青年の「自分への満足感」には、各国の青年と共通して、長所の存在や自分の考えをうまく伝えられること、難易度の高い課題にチャレンジしてみることなどが強く関連している一方で、「今が楽しければ良い」といった利他的な要因の関連性はそれほどでもなく、また弱いながらも他者への不信感が関連しているということである。

以上のことから、今回の調査で他国の青年との比較で明らかになった日本の青年の自尊感情の特徴とは、長所や主張性といった個人の特性と関連しながらも、他者にとって自分は役立つ存在であるかという有用性と分ち難く結びついたものであるという点で、他国の青年にみられない特徴をもつものであったといえるだろう。このようにとらえるなら、日本の青年のみならず、それぞれの国において固有の青年の自尊感情のあり方というのが存在するのかもしれない。したがって、「自分への満足感」、あるいは自尊感情というものは単純に高い低いという視点から評価するだけでなく、どのような構造（関連性）をもったものであるのかという視点からもとらえる必要があると考えられる。

文献

- Robins, R. W., Trzesniewski, K., Tracy, J. L., Gosling, S., & Potter, J. 2002 Global self-esteem across the lifespan. *Psychology and Aging*, 17, 423-434.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A.G., Mahzarin, R.B., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi,

C., Cai, H., & Krendl, A. 2007 Apparent universality of positive implicit self-esteem, *Psychological Science*, 18, 498-500.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

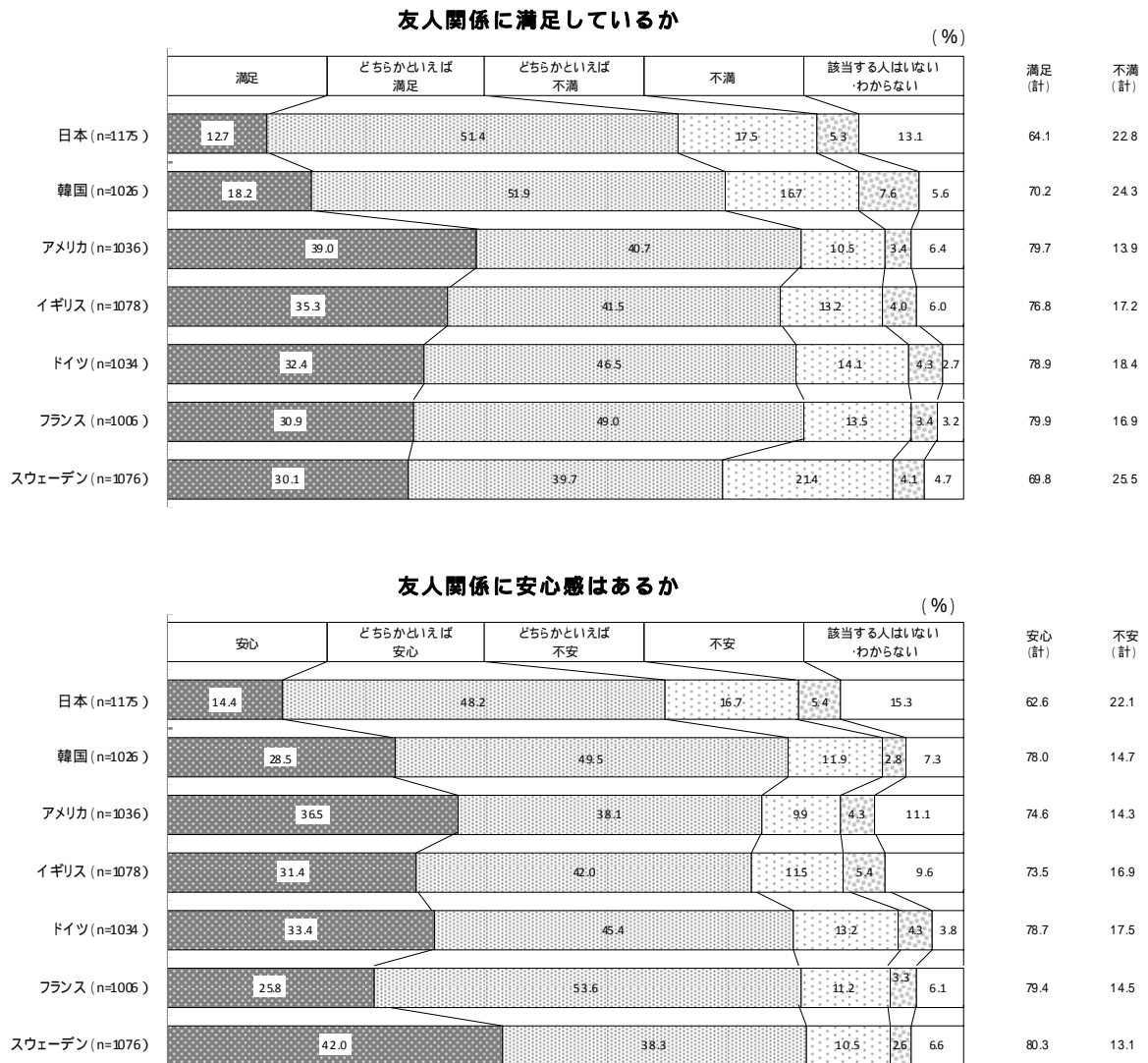
日本の青年の友人関係の特徴とその背景

筑波大学 人文社会学系 教授 土井隆義

はじめに

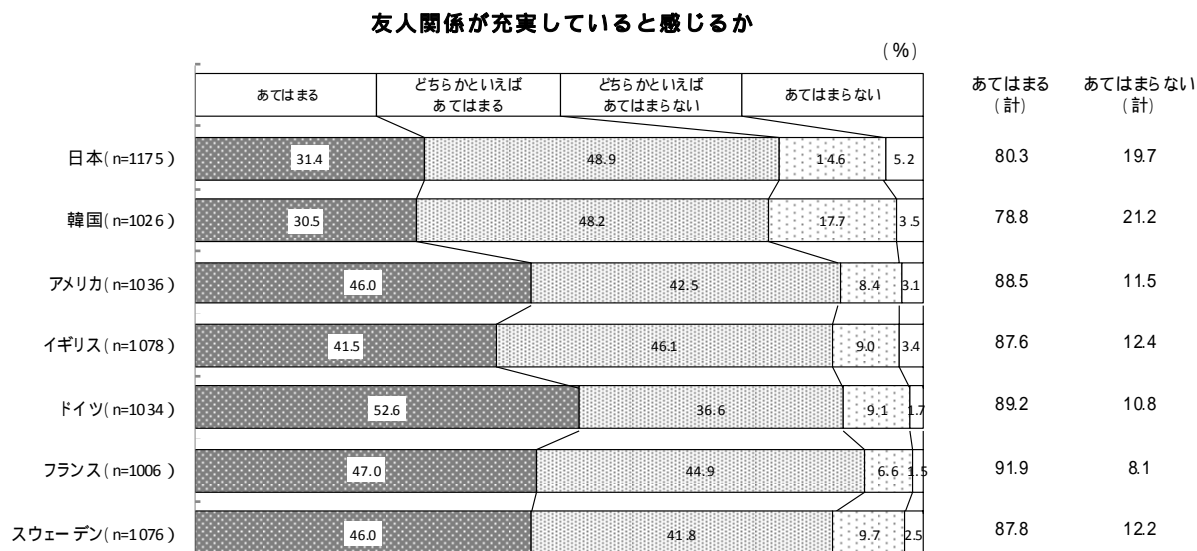
世界青年意識調査はこれまで8回ほど行なわれているが、今回、従来の個別面接調査からインターネット調査へと、データの収集方法が大きく変更された。またそれに併せて、具体的な調査項目にも大幅な変更が加えられている。ここでは、今回の調査で初めて独立項目として加えられた友人関係に関する設問に着目し、その調査結果から得られた知見について検討を行なってみたい。

本調査で新たに設けられた友人関係に関する設問は4つであり、友人と恋人についてそれぞれ満足感と安心感を尋ねている。そのうち友人に関する各国の集計結果は以下のようになっている。

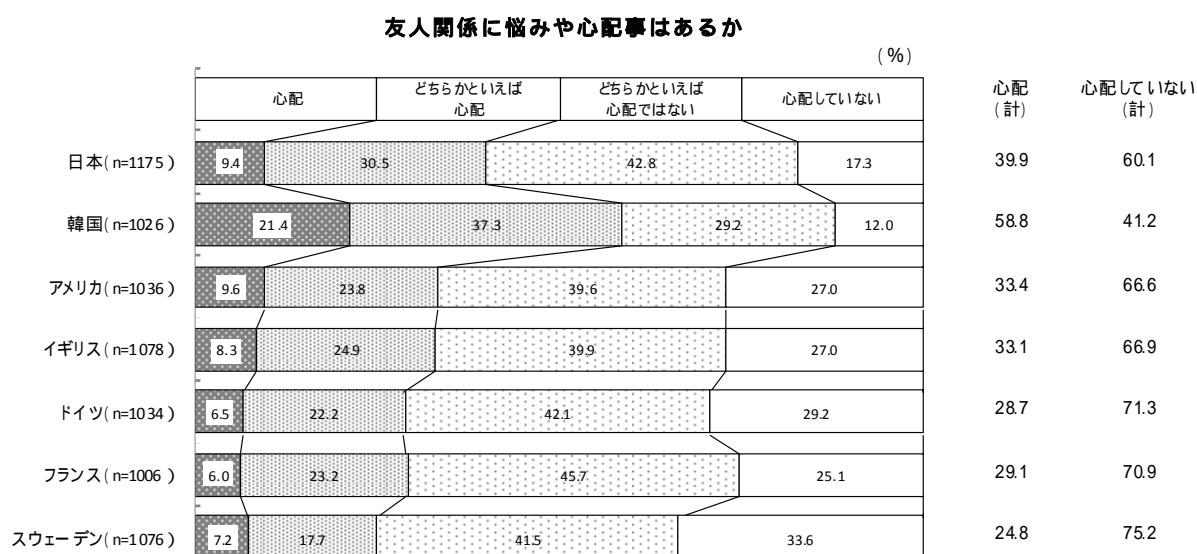


友人関係に対する満足感も安心感も、7か国のなかでは日本がもっとも低く、どちらも70%に達していない。とくに安心感のほうで相対的な低さが目立つ。ちなみに恋人との関係についても同様であり、やはり満足感も安心感も日本がもっとも低い。しかし、その差は友人関係ほど歴然としたものではなく、またどちらも70%を超えている。

これまでの世界青年意識調査では、友人や仲間といるときに充実感を覚えるかどうかを尋ねており、その設問は本調査にも継承されている。今回の7か国の結果は以下のようになっており、日本は韓国に次いで2番目に低い数字となっている。



他方、一連の調査では友人や仲間のことが悩みや心配事かどうかを尋ねており、今回の結果は以下のようになっている。日本は韓国に次ぐ高さで、他の諸国の傾向とも併せて比較すると、一見、友人や仲間に対する充実感と心配事は総じて反比例の関係にあるようにうかがえる。また、先ほどの満足感や安心感との間にも何らかの関係がありそうである。



もっとも、その他の調査項目で7か国を比較しても、日本の青年の満足度は総じて低くなる傾向にあり、友人関係だけが特異な現象であるとはいえない。しかし、友人関係に関

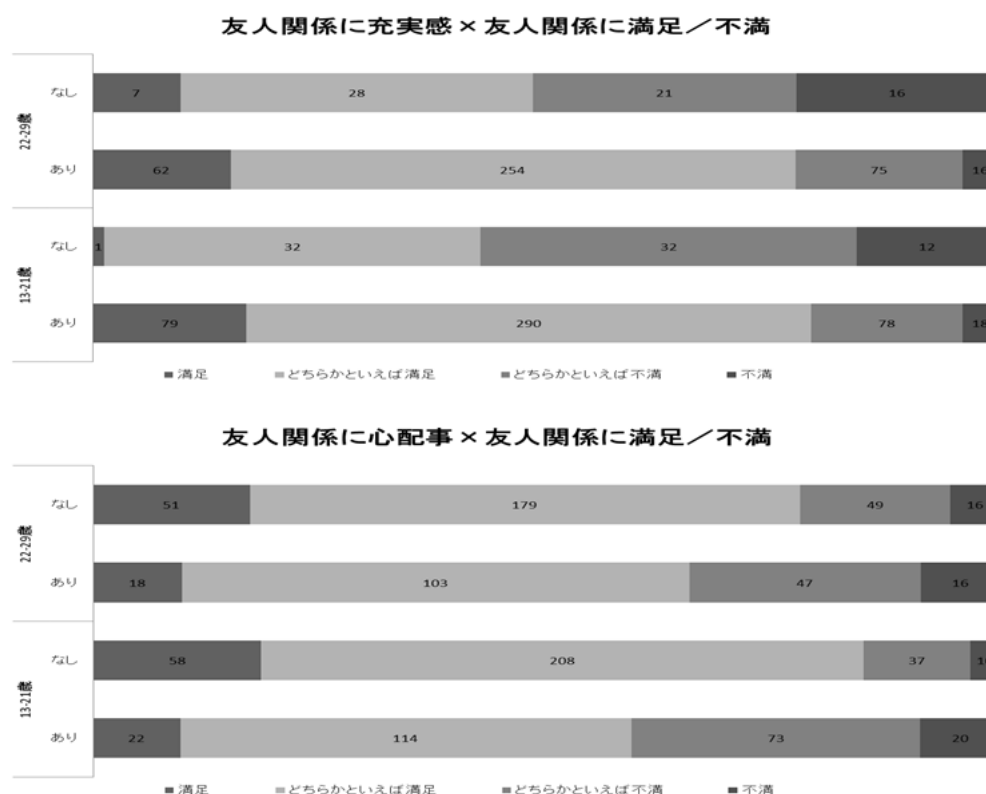
する設問は、今回から新しく追加された項目でもあり、またその低さはやはり目立つため、ここでは日本の青年の友人関係に焦点を絞り、その特徴と社会的背景について検討を行なっていきたい。

ところで、今回の調査の対象年齢は13歳から29歳であり、年齢差が16年もある。場合によっては親子ともなりうるほどの幅である。ちなみに従来の調査の対象年齢は18歳から24歳であり、年齢の幅は6年だった。あまりに幅が広いと、それぞれの年代で異なった傾向があるにもかかわらず、それらが相殺されてしまう危険性がある。そこで、ここでは青年前期（13～21歳）と青年後期（22～29歳）に分けて分析を行ないたい。どのような観点に立つかによって両者の分断線は異なってくるだろうが、ここではとりあえず両者のケース数なるべく等しくなるようにという操作的な観点から、若年からの累積度数が50%を超える年齢を境に2つの集団に分けておくことにしよう。

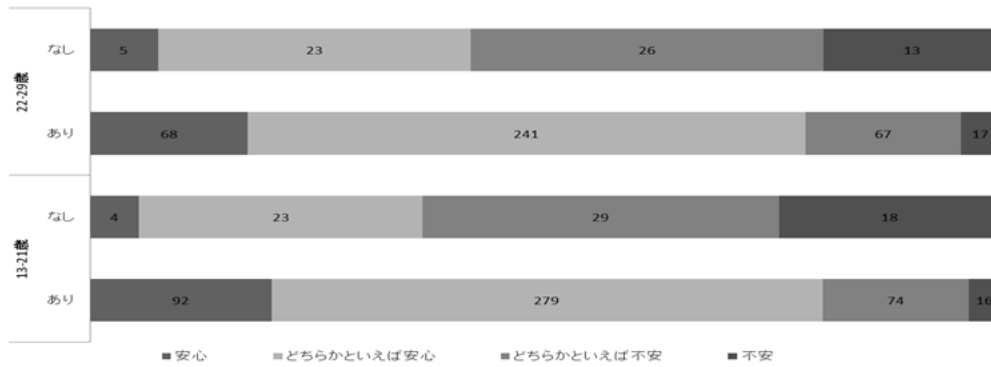
1. 友人関係の心配事と不安感

最初に、友人関係の充実感や心配事が、その満足感や安心感とどのように関わっているかを見ておこう。友人関係の充実感と、その満足感および安心感をクロスさせると、青年前期と後期の両方において、それぞれの間に1%水準で有意な正の関連が見出せる。また、友人関係の心配事と、その満足感および安心感をクロスさせると、青年前期と後期の両方において、それぞれの間に1%水準で有意な負の関連が見出せる。

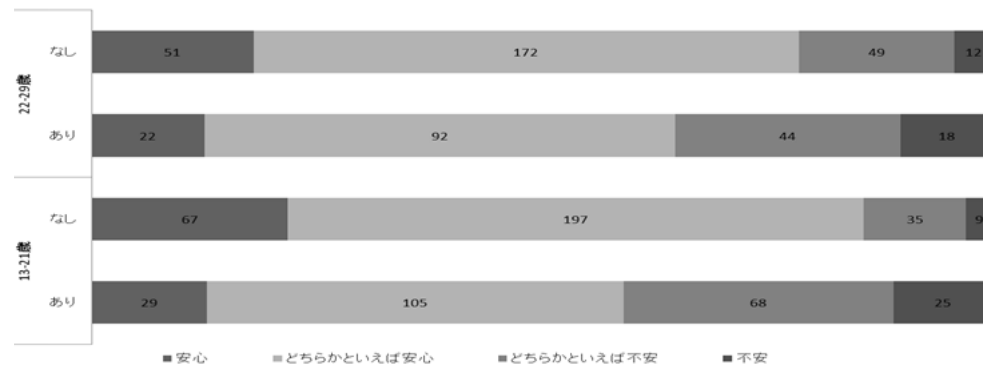
今回の調査では、いずれの設問も4段階評価で回答を求めているが、充実感と心配事をそれぞれ2段階評価に再カテゴライズしてクロスさせても、両者の関係は変わらない。2段階評価のほうが直観的にイメージしやすいし、また後ほど述べる理由もあって、以下では、充実感と心配事をそれぞれ2段階評価に再カテゴライズしたデータで分析を進めることにしたい。



友人関係に充実感×友人関係に安心／不安



友人関係に心配事×友人関係に安心／不安



さて、以上の作業からは、友人関係の充実感はその満足感や安心感と関連があり、友人関係の心配事はその不満感や不安感と関連があるといえそうである。ただし、クラメールの連関係数を使って、それぞれの関連の度合いを比較してみると、その差はごく僅かであるものの、満足／不満の軸よりも、安心／不安の軸のほうが、それぞれ充実感および心配事との関連性は強い。また冒頭で指摘したように、他の諸国と比較して日本の傾向が目立つのも、満足感の低さより安心感の低さだった。そこで以下では、友人関係の心配事と不安に焦点を絞って考察を進めていくことにしよう。ここで留意しておくべきなのは、青年前期における両者の相関係数が **0.30** で、後期のそれが **0.16** であることから、前期のほうが両者の関連性が高いといえる点である。この点については、また後に詳しく検討したい。

まず、友人関係に心配事を抱いている者と、メンタルヘルスに関わると思われる3つの設問である「悲しいと感じたこと」「憂鬱だと感じたこと」「つまらない、やる気が出ないと感じたこと」との関連を調べておくと、青年前期と後期の両方において、いずれも **1%** 水準で有意な正の関連が見られる。ただし、クラメールの連関係数で関連の度合いを比較すると、いずれの設問においても青年前期のほうが後期よりも相関が強い。青年前期のほうが、友人関係の心配事とメンタルヘルスとの間に強い関連のあることがうかがえる。

では、友人関係の心配事とその不安感と関連性を示し、それが青年後期より前期のほうに強く表われている背景には何があるのだろうか。また、それがメンタルヘルスと関わってくる背景にはどのような事情があるのだろうか。その点について次に検討してみよう。